庭園美の移ろい 深奥

知と感性の異種格闘技 11

京都には、美しい自然を取り入れた神社仏閣や有力者の別荘の庭園が数多く残る。都市化が進む中、日本人の自然観はどこに向かうのか。造園の歴史に詳しい国際日本文化研究センター名誉教授の白幡洋三郎さん（67）と、近代庭園造りの先駆者で「植治」の名で知られる七代目小川治兵衛の直系の作庭家小川勝章さん（42）が、特別公開中の並河靖之七宝記念館（京都市東山区）の庭園で語り合った。 （佐久間卓也）

30日まで「京の夏の旅」で特別公開中の並河靖之七宝記念館の庭園を訪れ、日本の文化や植治の仕事について語り合う白幡さん㊨と小川さん（京都市東山区）＝撮影・船越正宏

本来、暮らしの中の総合芸術

小川 こちらのお庭は、七代目が山県有朋公の別荘の無鄰庵と並行しながら手がけたようです。先日もお手入れさせていただきましたが、やりたいことをぎゅっと固めたお庭のように感じます。

白幡 狭い場所にも夢があふれ、植治の原点という気がしますね。七宝作家だった並河靖之さんの工芸は、西洋から見ても高い芸術性を備え、自宅兼工房だったこちらには、国内外から職人やお客が訪れたんでしょう。日常の憩いの場なのか、人をもてなす場なのか、植治はどんな考えで庭造りを請け負ったんでしょうね。工場ではなく、工房という名前にふさわしい、エレガントな雰囲気もある、並河さんからすれば商品を展示するショーウインドーのような場所だったのでは。そういう役割を持つ庭も珍しい。

■植治の試みを感じる

小川 植治の庭は本来、灯籠や石、木などを単体で主張させるより全体で景色を作る印象ですが、初期の仕事のこのお庭はさまざまな試みがされ、建物に呼応して造られたように思います。応接間からは、大ぶりの灯籠や飛び石、手水鉢が見え、堂々としたしつらえ。奥には仏間もあったようで、公私の区別を考え、個々の部屋から異なる景色をつくったのでは。池に張り出した廊下の南東角は特等席で、東側と南側の庭が融合した景色を見ることができ夢見心地になります。

白幡 江戸の大名屋敷の庭園も灯籠が多い。江戸は誰を喜ばせるための庭かはっきりしていて、灯籠を置くにも単純に面白いと思う場所に置いた。でも京都のお庭は難しい。京都の人は自分がやりたいことも、先人や名人がどう思うかも考えて刈り込んでかたちにする。植治はそういうしがらみをとっぱらって自分の好きなようにやり、第一人者になった。

平安時代以降、仏教は人間の内面追求を重視し、僧侶が修行の場を山林などに求めるようになり、仏教施設にも自然や庭園の要素が取り入れられ、京都にも多くの名園が誕生した。

白幡 日本人の宗教心はいろいろな意味で空間を作ってきた。庭園も、木を媒介に人と人がつながる場所で、そこに文化や物語が生まれる。近代までは枯山水や書院造り、大名庭園など日本庭園にも様式があった。ただ、明治以降の庭には特に、京の禅宗寺院の石庭や桂離宮などの王朝風の回遊式庭園が造園芸術の理想とされるようになり、明治維新で衰退した大名庭園は専門家の間でも評価が低い。そうした中で、植治は無鄰庵にも苔でなく芝をはるなど、園遊の理想を持つ雄大な庭を造り続けた。大名庭園の後継者とも言えるでしょう。

小川 先祖が何を考えていたのかは、残された庭から、現場で察するしかありませんが、試されている気もします。様式をつくり出す意気込みは必要だと思いますが、またまた木や石に教えてもらいながらの宝探しのような仕事です。

作庭家 **小川 勝章**さん

おがわ・かつあき 1973年京都市生まれ。立命館大法学部卒。宝暦年間から続く造園業を継ぐ父の十一代小川治兵衛氏の下で高校時代から修業。作庭のほか、歴代が手がけた庭園の修景などを担う。植治次期十二代。

■都市化、変わる自然観

日本の庭は「わび」「さび」などのイメージが根強い一方で、マンション暮らしの人や、西洋的なガーデニングの庭や外来植物も広がり、日本人の庭園観も複雑さを増している。

小川家に残る七代目治兵衛の名刺や新聞記事と、京都の庭園の歴史を考察する白幡さんの著書

小川 都会にも公園や街路樹はありますが、かわいそうな緑が多い。路上の木が一本枯れても悲しむ人がいるでしょうか。庭師が求められる仕事も変わってきています。今は、最初にコンピューターでマンションにこんな庭園を造ってモミジを植えますとデザインすればその通りの木を探してこなければならない。

白幡 逆転してるね、発想が。一年中紅葉する品種のモミジが人気と聞くと、芸術的挑戦や問題提起としてはありと思うが、季節感を考えると、かなんなぁ。

小川 木を植えるにもまっすぐ、等間隔にとか、コンピューターの画面の中でイメージが収まってしまう。予定調和の世の中、庭造りも現場で生まれる驚きや趣を反映しにくい。石も置き方を少し変えるだけで、隣の石や木の寄り添い方も変わり、それが最終的に美しくなることもあるのですが。

白幡 それは気付かれない価値を見つけ出してあげる作業ですね。もっと自分の「提案」をしたいということかな。多くの庭園論は視覚上の観賞に縛られている。庭園は単に自然の素材を利用した造形芸術ではなく、本来はそれを使って楽しむ暮らしの中の生きた総合芸術。社交の機能を持った大名庭園はそうした性格を持っていたと思います。

環境問題も庭の役割として強く意識されるようになった。日本の庭師は樹木を刈り込ませたら世界一。来日する外国人も、自然に加え、日本文化の粋を庭園の中に見たいという思いが強い。都市緑化も、ビルを建てておいて屋上庭園を造るのはいかがなものかという声もあるが、現実としてどちらも存在する。

時代や四季によって庭も移ろいを見せる。作り手の職人も観賞する側も、「多様性」と向き合わなければ庭園文化の深奥は捉えきれない。

小川 十一代目の父は常にネクタイを締めて仕事に出かけるなど、造園家のイメージを変えました。直接言葉で指導されたことはあまりなく、覚えているのは「子どもが砂場を作るように築山を作りなさい」ということぐらい。現場で少しずつ仕事を覚えましたが、怖いと思ったのは人によって大事なものが違うということ。ある場所で草をひくと、ある場所ではそれが大切な草の場合もある。雑なものはない。枯れたから植え替えれば良いということではない。木々の成長を願って祈って、人の存在をイメージしながら仕事をしなければと思います。

白幡 例えば、飲食店でサービスする人がテーブルに水やお皿を置く。言われたままやる人は同じ置き方しかしないけど、どの位置にどんな角度で置くかで変わるし、美しさも違う。庭造りも人と人をとりもつ。人の望むことを読み取り、人のために行う仕事は、真理は一つだけではない。だから多様な庭がある。

小川 人間より長生きする可能性が樹木や庭にはあり、次代に何かを託すこともできる。今はすぐに結果が求められ、木もすぐに花を咲かせないといけない。でも、待ちわびることも必要で、庭ぐらいゆっくり立ち止まって楽しんでほしい。観光で一度行った庭も、何回訪ねてもまた違った景色に出会えるはずです。

白幡 平安神宮の神苑は、借景といわれる東山が、背景の木が育ちすぎて見えない。作庭した植治が借景を見せたいと思っていたなら切ったほうがいいと思うが、木を一本切るにも哲学が必要で、歴史を再現するか、環境問題や時代への適応を重視するか、答えは一つではない。東京の浜離宮の庭園は今では世界貿易センタービルを借景に撮影するほうが自然な風景だと思うしね。何が日本の庭園文化なのかを決めるためにも、あれこれ悩みながら議論していく必要があると思います。 ＝原則第2木曜に掲載します

予定調和では趣は生まれぬ

国際日本文化研究センター名誉教授 **白幡 洋三郎**さん

しらはた・ようざぶろう 1949年大阪府生まれ。京都大大学院農学研究科博士課程修了。国際日本文化研究センター教授、中部大特任教授などを歴任。専門は比較文化。「大名庭園」「庭を読み解く」など著書多数。

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます